

# 大友時代を 生きた人々

鹿毛 敏夫

16世紀豊後の戦国大名大友義鎮(宗麟)の手元に、13世紀中国の禅僧画家牧谿が描いた絵が複数コレクションされています。例えば「鳩図」。永禄元(1558)年10月、義鎮は、この絵画を足利將軍の内談衆(將軍補佐)大館晴光に贈答し、次のような札状を受けています。「御絵一幅鳩、牧谿筆、御意に懸けられ候、誠に御もって外聞実儀、畏悦心底紙上に尽くしがたく存じ候」(「大友家文書録」)。牧谿が描いた「鳩図」の絵一幅を、お心付けいただきました。誠に内実ともに恐れ入りつつ喜ばしい心持ちで、手紙の文では書き表せないほどです、との意味です。

この時期、周防の大内義長を滅ぼして北部九州に勢力を伸長させてきた毛利氏に対して、大友義鎮は室町幕府の將軍足利義輝の下に使者を派遣し、豊前・筑前両国の守護職への自らの補任を依頼します。すなわち義鎮は、將軍補佐の地位にある大館晴光に両国守護職補任への取り成し

## 禅僧画家・牧谿の作品 守護・戦国大名垂涎の的に

されました。その際、大館晴光は「鳩図」の贈与を丁寧な言葉で謝し、その「秘蔵」を義鎮に伝えていきます。牧谿は、中国の南宋末期から元の初期にかけての禅僧であり水墨画家です。生没年は定かではありませんが、四川省の蜀の出身で、南宋の都臨安(杭州)に近い西湖畔の六通寺の開山であったと言われます。牧谿の絵画は、その後、禅宗の全盛期を迎えた室町期の日本に舶載されて高い評価を受けるようになることも、日本画壇にも大きな影響を与えます。さらにその作品は、室町幕府の將軍や各地の守護・戦国大名の垂涎の的となります。東山御物」と呼ばれる8代將軍足利義政のコレクションの中に、牧谿や玉澗の作品が多数含まれているのと同様に、九州の大名大友義鎮の絵画コレクションにも、彼らの作品が一種のブランド絵画として収集されたのです。

府内の上原館や大友館、臼杵の丹生島城の主殿の書院の間のみならず、豪商仲屋宗越や有力家臣の屋敷にも牧谿や玉澗の掛け軸が飾られ、時絵や螺鈿の調度品がしつらえられました。大名権力の主導による地域社会の文化的アイデンティティの結晶として、「大友文化」と称すべき特徴ある文化が16世紀の九州で展開していたと言えます。(名古屋学院大学国際文化学部長・教授)



牧谿「鳩図」(個人蔵)